

# キルケゴール Kierkegaard, Soren 1813 ~ 1855

デンマークの哲学者、宗教思想家。ニーチェと並ぶ実存思想の創始者。マルクスと同時代に生き、奇しくも共にヘーゲル哲学の根底的な批判者である。マルクスが経済社会の実体の矛盾を分析してヘーゲルの観念論を「転倒」させたのに対し、キルケゴールは、思弁的なヘーゲル哲学の客観性を批判し、人間の肉体と精神を対象化して掘り下げ、不安と絶望にとらわれる近代的人間の生を実存的に描いた。

キルケゴールは、引退した裕福な毛織物商の末子としてコペンハーゲンに生まれた。父親の強い影響力のもとで成長し、1830年にコペンハーゲン大学に入学する。「真理」と「イデー」に生きる決意を固めた彼は、1835年の秋頃、自ら「大地震」と呼ぶ恐ろしい大変革を内面的に体験した。その体験とは、相次いで家族を亡くしたため自分も34歳までに死ぬと確信したこと、父親が少年期に神を呪ったことがあり、しかも女中を犯した(後に妻として迎える)という事実を知ったこと、そしてその罰として自分の家族が抹消されると信じ絶望したことであるとされる。この体験は、その後の彼の生涯を決定づけた。

また、1841年に10歳年下のレギーネ・オルセンとの婚約を一方的に破棄したことも、彼の人生に強い影響を与えている。この「レギーネ体験」は、後々の作品を生み出す原動力となった。実際1843年以降、彼は実名で多くの宗教講話を刊行し、偽名でも『あれかこれか』に始まる作品群を矢継ぎ早に生み出している。なかでも1834年から書き始められた『日記』は、世界文学史上類なく貴重な作品であるとされる。

彼は1846年、風刺新聞『コルサル』により執拗な人身攻撃を受け、公衆から侮辱と嘲笑を受けた。この体験は、彼の「単独者」としての自覚をさらに深め、同時に大衆化してゆく社会の無責任性を痛感させた。晩年には、デンマーク国教会の世俗主義を糾弾し、正統信仰の復興を目指して激しく教会攻撃に立ち上がったが、教会を攻撃した小冊子『瞬間』第10号の原稿を残して路上に倒れ、42歳で没した。「単独者」として、「主体」として、「キリスト者」として生きようとした彼の思想は、20世紀の哲学(ハイデガー、ヤスパーズ)、神学(バルト)、文学(リルケ、カフカ、サルトル、カミュ)に深い影響を与えている。

## Great Books 37 不安の概念(Begrebet Angest)

本書は1844年6月にヴィギリウス・ハウフニエンシスの偽名で刊行された。キルケゴールの著作の前期を代表するもので、晩年の『死に至る病』に先立つ重要な作品とされている。本書は決して読みやすいものとは言えないが、この著作の主題は、不安についての心理学研究と墮罪および原罪についての教義的考察である。

彼は「不安は目まいにたとえることができる」と述べ、「不安は可能性に先だつ可能性としての自由の現実性」だとした。つまり人間は絶え間なく未来に向かって自己を形成しつつあるが、その未来はいまだ実現されていない無であり、自己がその主体的責任において引き受ける可能性である。この未来であり、可能性であり、無である現実が自由である。人間はこのような自由を前にたじろがざるを得ない。そしてその感情が「不安」であるとした。

キルケゴールの思想においては「大地震」体験と「レギーネ体験」に見るように、エロスのなものが非常に重要なものであった。彼の若き日の作品にモーツァルトの『ドン・ジョバンニ』についての卓越した論評がある。彼はこの性的なるものを創世記のアダムの墮罪と原罪の教説に関連させ、自己自身の不安を素材とし、精神のもとにエロスのなものを服従させることを課題とした。キルケゴールの不安の概念はフロイトの精神分析などにも大きな影響を与えている。

## Great Books 38 死に至る病(Sygdommen til døden)

本書はそれまでの彼の著作とは違い、晩年キルケゴールが闘ったデンマーク国教会に対し真のキリスト者の在り方を提示しようとしたものである。

彼の構想では、第1部は「罪の意識について、死に至る病、キリスト教講話」、第2部は「根本的な

治療、キリスト教的治療、贖罪」となっており、その第1部にあたるものとして、1849年にアンティ＝クリマックス著、セーレン・キルケゴール編で発表された。翌年1850年に刊行された第2部『キリスト教の修練』とあわせて読むことが推奨されるが、一般的には前編にあたる『死に至る病』が圧倒的に有名で、キルケゴールの代表作とされる。

本書は2編から構成されている。第1編では「死に至る病」は絶望のことであって、精神もしくは自己における病であるとされる。彼は精神について「精神とは自己である。しかし自己とはなにか。自己とは関係自身に関係する一つの関係である。」と述べ、人間の精神は孤立したもの、観念的な固定的なものではなく、他者と永遠者と関係を結ぶ動的で実存的なものであると洞察した。

一方、絶望については、「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己(総合)における分裂関係である」と述べた。精神は内なる永遠者に対して各瞬間ごとに分裂しているとしたのである。さらにキルケゴールは絶望の諸形態について論述していくが、そこにおいては、彼の「間接的伝達」もしくは「実存弁証的な多面鏡」といわれる文体が遺憾なく発揮されている。

第2編「絶望とは罪である」において、罪とは「神の前で、あるいは神の観念を持ちながら、絶望して自己自身であろうと欲しないこと、または絶望して自己自身であろうと欲することである」とされ、神の前における罪の諸相がさまざまに展開されている。本書によりキルケゴールの実存的な罪の理解は極めて深いところに達したとされる。

## ◆ Great Books 文献案内

- 📖 不安の概念(岩波文庫) / 齋藤信治(訳)  
岩波書店 1979年刊 299p <I134/キA> 資料番号 12250353
- 📖 世界の名著 40 キルケゴール / 梶田啓三郎(編)  
中央公論社 1966年刊 598p <080/5/40> 資料番号 12784575
- 📖 キルケゴール著作集 10 不安の概念・序文ばかり / 氷上英廣(ほか訳)  
白水社 1964年刊 379p <134.6/40/10> 資料番号 10216026
- 📖 キルケゴール著作集 11 死にいたる病・現代の批判 / 松浪信三郎(ほか訳)  
白水社 1962年刊 304p <134.6/40/11> 資料番号 10216034
- 📖 死に至る病(岩波文庫) / 齋藤信治(訳)  
岩波書店 1957年刊 237p <I134/キA> 資料番号 20967303

## ◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 ドイツにおけるキルケゴール思想の受容 / 河上正秀(著)  
創文社 1999年刊 352, 29p <139.3HH/6> 資料番号 21148267
- 📖 北欧思想の水脈 / 尾崎和彦(著)  
世界書院 1994年刊 276, 4p <139CC/106> 資料番号 20672945
- 📖 キルケゴールの生涯と作品 / F. ブラント(著) 北田勝巳, 北田多美(訳)  
法律文化社 1991年刊 205p <139Z/102> 資料番号 20339602
- 📖 キルケゴール著作活動の研究 前篇・後編 / 大谷愛人(著)  
勁草書房 1989~1991年刊 <134.6/73/1~2> 資料番号 20070298, 20310116
- 📖 逍遥する哲学者 / 橋本淳(著)  
新教出版社 1979年刊 322p <134.6L/51> 資料番号 10216240
- 📖 人類の知的遺産 48 キルケゴール / 小川圭治(著)  
講談社 1979年刊 410, 4p <280.8/13/48> 資料番号 10497527